
シークレットゲーム episodeK

sei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム episode K

【Nコード】

N6232K

【作者名】

sei

【あらすじ】

総一たちが参加したゲームが終わりを告げてから3年、再びゲームが開始された。そこに待ち受けるのは新たな出会い、新たな戦い、そして、新たな絆。13人のプレイヤーの運命は……

人物紹介（前書き）

本編の登場人物です。

名前と簡単な紹介は登場時に更新していきます。

何か希望があれば感想にてお伝えください。可能な限り考慮します。

人物紹介

如月 司 (きさらぎ つかさ) 17才

本作品の主人公。

人を疑うことを嫌う優しい性格の持ち主。

生き残るために仲間を疑わなければならないゲームに参加させられ、苦悩することとなる。

北条 かれん (ほうじょう かれん) 15才

本作品のヒロイン。

今では手術に成功し激しい運動もできるが、数年前までは重い病気で入院していた。

その際、莫大な手術費をだしてくれた女性に憧れを持っており、自分もそうなりたいと思っている。

工藤 香織 (くどう かおり) 17才

強気な性格をした女子高生。

自分にも他人にも完璧を求めるため、周囲からはわがままに見られてしまう。

黒木 勉 (くろき つとむ) 15才

学校ではいじめられているが、それは自分を助けない周囲の人たち

が悪いと考えている。
殺されなければ殺されるゲームをすんなりと受け入れてしまう。

長谷川 拓哉 (はせがわ たくや) 20才

某有名大学の学生。

頭もよく、人の死を見ても比較的冷静でいられるが、多少思い込みが激しい

杉山 雅治 (すぎやま まさはる) 31才

自分にとって無意味であると思うことは一切やろうとしない怠け者
しかし、損得勘定だけで生きているわけではなく、他人のために自分に不利益になる行動も躊躇わずにすることもある。

岩崎 健太 (いわざき けんた) 51才

ゲーム参加者の中では最年齢である男性。
ゲームに関しては最も客観的にとらえている。

??? ?才 ?

??? ?才 ?

??? ?才 ?

?	?	?
?	?	?
?	?	?
?	?	?
才	才	才
?	?	?

人物紹介（後書き）

？ばかりですみません。よく考えてみたら一人だけで2000字もいく分けないですね・・・

一話に登場した少女はまだ秘密ということで二話を楽しみにしてください。 （1話）

一番最後より最初の方が良いと思い、移動しました。
次の話から多くの人物が登場する予定です。 （2話）

プロローグ（前書き）

この小説はシークレットゲームのかりんルートのアフターストーリーになります。

かりんや麗佳は本編には基本的に出てきません。素人ですのでご指摘があればお願いします。

プロローグはゲーム内の切り抜きになるので、一話から読んでいただいてもいいです。

プロローグ

とある建物の中、ほとんど使われていないのであろう薄汚れた部屋の中に、二人の女性の姿があった。

二人のうち一人、二十歳前後の女性は何故か悲しそうな顔をしてもう一人、彼女より若い少女のことを見ていた。

少女

「分かった、約束する。あたし、前向きに生きていくって。これからも精いっぱい生きるって約束する！」

????

「ありがとう、」

どうやら二人の他にも部屋の外に誰かいる様で、少女は扉越しにその人物とはなしをしていた。しかし、何かがあったのか、少女の顔には涙があふれており、両手も赤くなっていた。

少女

「でも、でもね。……を忘れることはできない。あたし、のこと絶対に忘れない」

????

「……そっか。わかった。もう泣いてないな？」

少女

「……うん、……泣いてないよ」

その言葉とは裏腹に少女の目からは再び涙が流れていた。しかし少女は涙をこぼしながらも言葉を続けた。

少女

「だから安心して。あたしは　　みたいにみんなを助けられるように強くなる。人を思いやれる強さをあたしが引き継ぐよ。だって、それは　　から教わったことだもの」

???

「そうか……安心した」

それが通じたのか扉の向こうからそう返事が返ってきた。

???

「　　、俺はお前に会えてよかった。　　に会えたからこころま
でこれた」

少女

「あたしも、　　に会えてよかった。　　に……会えて……本当に
……よかった……」

少女の口から嗚咽が漏れそうになる。

???

「泣いてるのか？」

少女

「……っ……泣いてないよ、ばか、」

???

「そうか……」

少女

「そうだよ」

全てのことを伝え終わったかのように二人の間に会話がなくなり、部屋を沈黙が支配したその時だった。

ビィー……… ビィィー………

『貴方のいる場所は侵入禁止エリアです。退去しない限り15秒後にペナルティが執行されます』

どこからかアラートと共に合成音声が届いてきた。

????

「じゃあな、俺がいなくても、らしく元気に、前向きになー！」

少女

「うん……」

これが最後だというように少女は頷くが、我慢することが出来なくなり、ドアを殴りながら、何度も愛する人の名前を叫ぶ。

拳の皮膚が裂け、血がにじんでも少女は叩くのをやめなかった。

しかしながら、それをあざ笑うかのように銃弾が扉を打つ音が響き渡った。

その音で少女は理解してしまった。もう愛する人の声を聞くことが出来ないと考えるしかないということ……。。

数時間後、数人の男たちが、入ってきて少女たちを運び出していた。おそらくここで殺された人たちの死体も運び出され、この建物からは死んだ人も含めた全ての人がいなくなるのだろう。

しかし、この建物の役目はこれで終わったわけではない。なぜなら、このゲームはこれが初めてでなければ最後でもないのだから。

あれから3年後、この建物に再び人々が集められた。次なるゲームを開始するために。

第1話（前書き）

この小説はシークレットゲームのかりんルートのアフターストーリーになります。

かりんや麗佳は本編には基本的に出てきません。

素人ですのでご指摘があればお願いします。

第1話

少年、如月司は混乱していた。なぜなら、目が覚めた時に彼の目の前に広がっていたのは、どう考えても彼の部屋ではなかったからだ。

彼は大き目の部屋を双子の妹である葵と一緒に使っている。朝起きたら兄妹で挨拶をするのは自分たちの部屋をもらった小学生の頃から10年以上続けている習慣である。

しかしながら閉鎖されたホテルの様にも見えるこの部屋には彼女のいる気配など微塵も感じられない。

司

「おーい、葵、いないのか」

一縷の望みにかけて呼びかけてみるものも、当然、返事が返ってくることはなかった。

司

「いるわけないか。それよりどうして此処にいるかだよな」

司は昨日のことを思い出そうとするのだが、頭の中に霧がかかったようになかなか思い出すことが出来なかった。

司

「昨日、部活が終わった後、いつもの道りに校門で真人と別れて、……」

それでも、少しずつ思い出すことが出来た。

司

「その後、その後どうしたんだ。」

しかし、司の記憶はそれ以上思い出すことは出来なかった。

司

「もしかして、事故にでもあったのか？」

そう考えて、自分の体を調べてみてもどこも怪我をしている様子もなく、事故にあったため、どこかに運び込まれたわけではないことがわかる。

司

「事故の可能性はないか。そうなるっていったい……」

考え込む司の脳裏にある事件のニュースが思い出された。

アナウンサー

『 県××市在住の高校生、御剣総一の行方が分からなくなっているニュースです。御剣君は七日前母親に友人の家に泊まるとメールを送っていました。期間が過ぎても家に帰らず、心配した父親が友人宅に電話したところ、御剣君は友人を訪ねていないことが発覚しました。当時御剣君はほとんどお金を持っていなかったため、家出の可能性は低く、警察は何らかの事件もしくは事故に巻き込まれたものとみて捜査をしています。また、事件が発覚する前日に、インターネット上のいくつかの掲示板に「御剣総一は誘拐され殺された」という書き込みがされており、事件との関わりを……』

その事件は司の住んでいる町から2つ離れただけの町で起きており、司の通う中学校でも登下校中の見回りを強化するなどの対応をしていたため、印象に残っていたのである。

司

「まさか、誘拐……」

そのことに気がつくのとたんに恐怖が湧いてきた。

司

「何か、武器になるようなものは……、あっ」

部屋を見回してみると、するとそこには普段通学に使用している鞆が置いてあることに気づいた。

司

「やっぱり俺の鞆だよなあ。けどさすがに竹刀は無いか」

司は剣道部に所属しているため、普段から竹刀を持ち歩いており、当然誘拐されたときにも竹刀を持っていたはずである。しかし、部屋の中にはそれらしいものは見当たらない。

司

「ん、何だあれ……」

その時、机の上に何かが置いてあることに気づいた。

司

「PDAだよなあ、これ」

それはトランプを模したデザインになっているPDAだった。

大きさはたて10センチ、横6センチ程、ディスプレイはPDAのほぼ前面を埋め尽くしており、その下に小さなボタンが据え付けであった。また、PDAの側面と底面にはコネクタが付いていた。

司
「ダイヤのジャック」

なぜ、こんな所にあるのか不信に思いつつもPDAのボタンを押してみる。

司
「あれ？」

ボタンを押すと、バックライトが点灯して、PDAの画面が切り替わった。

しかし、切り替わる瞬間、画面に映り込んだ司自身の首に何かが付いていることに気が付いた。

司
「これは、首輪？」

直径が2センチ程の首輪が司の首にはまっていた。

司
「何だこれ、取れない」

首輪は司の首に密着しており、外すことはおろか指を入れることすら困難な状態だった。

コツッ、コツッ、コツッ

その時、部屋の外から足音が聞こえてきた。

誰かがこちらに向かって来ているのだろう。

司

「誘拐犯か」

もし本当に誘拐されてきたのであれば、近くに誘拐犯がいると考えるのが普通だ。

つまり、近づいてきているのは誘拐犯である可能性が高い。

司

「鞆だけでもあるだけましか……」

司はいざという時に武器として使うために鞆を持ち、扉を勢いよく開け放った。

?????

「ぎゃあ」

飛び出した司の前には突然現れた司に驚く少女の姿があった。

『ゲーム開始より1時間15分経過/残り時間71時間45分』

第2話（前書き）

この小説はシークレットゲームのかりんルートのアフターストーリーになります。

かりんや麗佳は本編には基本的に出てきません。素人ですのでご指摘があればお願いします。

この回からヒロイン登場です。

第2話

どことなく古ぼけた建物の中、一人の少女が歩みを進めていた。首に首輪が巻きついていて、ことから分かるよう、彼女もまた司と同様起きてみたらまったく身に覚えのないこの場所へと連れて来られていたのであった。よく見てみると彼女の手にも司が部屋で見つけたPDAと同じものが握り締められていた。

少女の今の行動の目的は三つ。

一つはこの建物の出口を見つけ出すこと。

もう一つは誰か自分以外の人を探すこと。

もちろん、彼女はこの建物の中に誘拐犯がいる可能性を考えていないわけではない。いや、そもそも彼女はこの建物の中に自分以外に誘拐されてきた人物がいるなどと考えてなどいないのである。

それならばなぜ、彼女は人を探しているのか。当然のことだが、犯人を倒して此処から逃げ出そうと考えているわけではない。そもそも中学生の、ましてや同年代の女子から見ても小柄と分類される彼女にそんな事が出来るわけがない。

それでも彼女にはそれをしなければならぬ理由があった。いや、正確にいうならばやらなければならないのは最後の目的であり、人を探すのはそれをするために最も可能性が高いからである。

少女は立ち止まり、肩から下げている鞆の中を確認する。どうやら中に入っている何かを確認しているようだ。

ドンッ

少女

「きゃあ」

ちょうどその時、彼女の目の前の扉が開け放たれて何か飛び出してきた。

少女

「……………」

青年

「……………」

しかし、飛び出してきた青年も何か予想外のことが起きたように驚愕の表情を浮かべるだけで、無言になってしまふ。

沈黙に耐えかねた少女は恐る恐るながら、本来の目的を尋ねてみることにする。

少女

「……………あ、あの、お水、持っていませんか？」

青年

「……………はあ？」

飛び出してきた青年、司の表情が驚愕から困惑に変わるのにはやがて時間は必要なかった。

少女

「ありがとうございます」

司から水筒を渡された少女は中に入っていたお茶で薬を飲むと、
そついいながら水筒を司に返してきた。

司

「それはいいけど、なにか病気なの？」

誘拐された時に持っていたということはたまたま貰いに行った帰りに誘拐されたのでなければ常に持ち歩いているということになる。そう判断したため司は彼女が重い病気に罹っているのではないかと判断したのであった。

少女

「いえ、病気自体はもう治っているんですけど、臓器移植を受けているんです。これはその拒絶反応を抑えるための薬なんです。」

司は臓器移植をした人は体が移植した臓器を受け入れない事があるため、常に薬で抵抗を抑えなければならぬことを思い出し納得した。

少女

「それで、えーと、その」

少女は何かを言い出そうとしたが、急に困った顔をして考え込んだ。

司

「そういえば、まだ名前も知らなかったね。俺は如月司。」

司はその様子を見て、お互いに何も情報を交換していないことを思い出した。

少女

「あ、はい。私は北条かれんっていいます。それで、如月さんもここにはやっぱり？」

少女、かれんは司の様子を見て、誘拐犯ではないと判断したのだろう。司にそう尋ねる。

司

「ああ、起きたらこの部屋にいたんだ。けど、二人いたってことは他にも人がいるのかなあ」

かれん

「たぶん全員で13人いるんだと思います。」

司

「13人？何か理由でも」

かれん

「えっと、実は如月さんに出会うまでは関係ないことだと思っただんですけど。これにそれらしいことが書いてあったんです。」

そういつてかれんは鞆の中からPDAを取り出して、司に見せた。

司

「そういえばこの部屋にも同じものがあつたな」

司は机の上に置きっぱなしになっていたPDAを持ってきて、かれんに見せる。

かれん

「やっぱり如月さんも同じのをもっていたんですね」

司とかれんのPDAは司のPDAの画面に映っていたのがダイヤのジャックだったのに対して、かれんのそれにはハートのクイーンが映っていることを除けば全く同じものだった。

かれん

「これが本当だとルールを教えあつたほうがいいですよね」

司

「うん、そうなるね。かれんちゃんは何番のルールがあるの?」

PDAを操作して、簡単にルールを読んだ司はそう尋ねる。

かれん

「えーと、私のPDAに1番と2番、4番それから7番ですね」

そういつい、かれんは自分のPDAの画面を司に見せる。

そこには4つのルールが表示されていた。

ルール1

参加者には特別製の首輪が付けられている。それぞれのPDAに書かれた状態で首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外す事ができる。条件を満たさない状況でPDAを読み込ませると首輪が作動し、15秒間警告を発した後、建物の警備システムと連携して着用者を殺す。一度作動した首輪を止める方法は存在しない。

ルール2

参加者には1〜9のルールが4つずつ教えられる。与えられる情報はルール1と2と、残りの3〜9から2つずつ。およそ5、6人ずつルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。

ルール4

最初に配られる通常の13台のPDAに加えて1台ジョーカーが存在している。これは、通常のPDAとは別に、参加者のうち1名にランダムに配布される。ジョーカーはいわゆるワイルドカードで、トランプのカードをほかの13種のカード全てとそっくり偽装する機能を持っている。制限時間などは無く、何度でも別のカードに変えることが可能だが、一度使うと1時間絵柄を変えることができない。さらにこのPDAでコネクタして判定をすり抜けることはできず、また、解除条件にPDAの収集や破壊があった場合にもこのPDAでは条件を満たすことができない。

ルール7

指定された戦闘禁止エリアの中で誰かを攻撃した場合、首輪が作動する。

かれん

「ここ、ルール4にPDAは13台あるって書いてあったから、13人いるんじゃないかなって」

司

「確かにその可能性は高いね」

かれんは自分が人数を推測した理由をいい、司もそれに同意する。

かれん

「如月さんには何が書いてあるんです？」

司

「俺のは、1、2以外だと、5と6だね」

司も同じようにPDAを見せる。

ルール5

侵入禁止エリアが存在する。初期では屋外のみ。進入禁止エリアに

侵入すると首輪が警告を発し、その警告を無視すると首輪が作動し警備システムに殺される。また、2日目になると侵入禁止エリアが1階から上のフロアに向かって広がり始め、最終的には館の全域が侵入禁止エリアとなる。

ルール6

開始から3日間と1時間が過ぎた時点で生存している人間を全て勝利者とし20億円の賞金を山分けする。

司

「じゃあ、集まったルールから考えると、とりあえず、上の階を指したほうがいいのかなあ」

かれん

「そうですね。一階で何かしないといけないわけでもないですし」

二人のPDAはジャックとクイーンであり、解除方法はそれぞれ

JのPDA・・・開始から24時間以上行動を共にした人間が2日と23時間時点で生存している事。

QのPDA・・・2日と23時間の生存。

となっており、解除するために、1階でやらなければいけないことは無く、1階が進入禁止になる前に2階へと移動したほうが良いのだった。

司

「とんでも地図がこれじゃあな」

PDAには地図を表示する機能が付いており、そこには2階へと上がる階段らしきものも描かれていた。しかし、建物の中は入り組んでいる上、かなりの面積があるため、自分たちがどこにいるのか理解できないのだ。

かれん

「とにかく行動しないと始まりませんね。行きましようか、如月さん」

かれんがそういうものの、司は黙り込んでしまった。

かれん

「どうかしました。如月さん」

司

「うーん、俺たちこれから3日間一緒に行動するんだよなあ」

かれん

「そうなりますね」

二人の首輪が外れるのは2日と23時間を過ぎた時点、これからゲーム終了の2時間前までは行動を共にすることになるだろう。

司

「それだけ一緒に行動するのに如月さんってのは他人行儀過ぎると思っただよねえ」

かれん

「そうですか、それでは、司さんで」

司

「うん。それでいつか。」

それじゃあ、いこっか。かれんちゃん」

そういつて、二人は部屋の外へと進んでいった。

その先に何かがあるかも理解しないまま……

『ゲーム開始より2時間40分経過/残り時間70時間20分』

第2話（後書き）

登場人物紹介を目次の一番頭に移動しました。

第3話（前書き）

この小説はシークレットゲームのかりんルートのアフターストーリーになります。

かりんや麗佳は本編には基本的に出てきません。

素人ですのでご指摘があればお願いします。

第3話

かれん

「司さん」

司

「なにかな、かれんちゃん」

かれん

「絶対に何かあるって言いましたよね」

司

「言ったような気がするかなあ」

かれん

「これのどこに何かあるんですか？」

司

「え〜と、一応いっぱいあるってことだね」

かれん

「つつか〜さ〜さ〜ん」

行動を開始してから約90分後、自分たちで地図を書きながら建物内を探索し、それをPDAの地図と比べることで、なんとか現在の位置を把握することが出来た。そこで二人は当初の目的通りに、階段を目指すことにした。

しかし、地図には階段とらしきものが5ヶ所、エレベーターらしきものが2基描かれていた。そしてそのうち、階段には4つ、エレベーターには1つ、要するにそれぞれ1箇所を除き、そこにはバツ印が書かれていたのであった。

かれんは印が書かれていない場所を目指そうと主張したのだが、司がバツ印の所には此処から脱出するための何か重要なヒントがあるのではないかと言い出したのである。それで、しばらく口論が続いたのだが、そこから印が書かれていない場所までは少し距離があったため、バツ印の書かれている階段の中で一番近い場所を目指すことにしたのである。

その結果が、・・・・・・・・

確認した現在地は正しかったようで、二人は迷うことなく目的地へとたどり着くことが出来た。地図通りそこには階段があった。しかし、確かに階段はあった、ありはしたのだが、そこから2階へと上がることは出来そうになかった。なぜならそこにあつたのは階段だけではなく、階段を塞ぐ様にして多数の瓦礫が置いてあつたのだ。

瓦礫は大人の男が数人集まっても動かすことが出来ないとと思われるほどに大きなもので、それが天井まで積み上げられている上に、鉄条網でしっかりと固定されているため、瓦礫をどかす事も、乗り越えて先に進むことも出来そうに無かつた。

かれん

「だから印の付いていないほうに行こうって言ったじゃないですか」

司

「ごめん、ごめん、けど、バツ印の階段は使えないってことはいつきに6階まで上ることは出来ないかあ」

かれん

「そうですねえ」

多少不機嫌だったかれんだが司の言葉に深刻な表情へと変わる。

2階部分の地図にも階段やエレベーターには1箇所を除いてバツ印が描かれていた。しかし、バツ印が描かれている箇所は異なっており、もしそこが同様に封鎖させているとなると、階を上るたびに次の階段まで移動しなければならず、直接最上階である6階まで行くことは出来ないのである。

かれん

「それじゃあ、急いで移動したほうがいいですよ。幸い、此処からならそんなに距離はないですし」

司

「いや、次はここを目指してみようと思うんだ」

地図を見る限り、印のない階段は二人がいる場所からおよそ30分ほど行ったところにあった。だからかれんはそこを目指そうと提案する。しかし司はその意見に反対し、違う場所を指し示していた。

かれん

「エレベーターですか？でも此処から距離がありますよ」

たしかに、エレベーターのある場所は遠く、階段と比べると倍以上離れていた。

司

「そうなんだけどね。でもエレベーターなら6階まで行ける可能性もあるし、それにエレベーターがどうなってるのか1度見ておいたほうがいいと思うんだ」

かれん

「それはたしかにそうですけど、でも早く上に行かないと殺されちゃう分けだし」

かれんは司の意見も正しいと思うものも、先に行かないとならないと思ひ賛成しかねている。そんな時だった。

『いやあ————————』

何処かから建物内に響き渡る悲鳴が聞こえてきたのは。

司たちが階段へとたどり着いていた頃、同じように階段を目指す少女がいた。年は高校生ぐらいであろう。首に巻きついた首輪と、手の中にあるPDAが彼女もまた誘拐され、この建物に連れて来られたことをものごとっている。

彼女は最初は外に出るために、出入り口らしき広いロビーを目指していた。しかし、彼女はそこから外に脱出することは出来なかった。

出入り口にはシャッターが降ろされており、しかもシャッターの一部には破られた跡があったが、その向こう側はコンクリートで固められていたのである。

なので彼女は、そこからの脱出は不可能だと判断して、ひとまず2階へ上がるために階段を目指すことにしたのである。

階段まであと少しまで来たとき、彼女の耳に足音が聞こえてきた。

少女

「誰かいるの」

その声に応えて通路の角より出てきたのは中学生ぐらいの少年だった。その首には首輪が巻かれており、手にはなにかの破片だろうか木材が握られていた。

少女

「あなたも、誘拐されてきたの？」

少女は少年の首に巻かれているのが、自分の首に巻かれているものと同じものだろうと判断し、そう尋ねる。

少年

「は、はい。黒木勉っていいいます」

少女

「やっぱりそうなの。私の名前は工藤香織。どう、一緒に行動しない？此処から出るためには協力した方がいいと思うのだけど」

香織から見て、黒木はあまり頼りがいがあるようには見えなかったが、一人で行動するより、二人で行動するほうが生き残れる可能性が高いと判断したため、黒木に仲間にならないかと誘う。

黒木

「い、いいんですか？」

香織

「いいに決まってるでしょ。まずは情報交換からかしら」

そう言いながらPDAを取り出す香織に対して、黒木がとつた行動は手にしていた木材を大きく振りかぶることだった。

ドスッ

香織は直前で気が付くものの完全にかわすことはできず、肩に木材が当たってしまった。

かおり

「い、いったい何を？」

黒木

「ぼ、僕の首輪をは、外すにはみ、みんな死なないといけないんだ。だから」

黒木に与えられたPDAはハートの9の首輪を外すためには自分以外の死亡していなければならない。

9のPDA・・・自分以外の全参加者の死亡。手段は問わない。

自分以外の以外のプレイヤーが生きている限り、このPDAの持ち主は生き残ることは出来ない。それはつまりナインのプレイヤーは自分が死ぬことを覚悟しない限りは絶対に他のプレイヤーと協力することは出来ない。だからこそ黒木は香織のことを襲ったのだ。

黒木

「っ、次こそは」

もう一度攻撃を加えようとする黒木だったが、彼は自分がすでに重大なミスを犯していたことに気づいていなかった。

『貴方はルールに違反しました』

突然黒木の首輪で小さな赤い光が点滅し始める。

『貴方はルールに違反しました。15秒後にペナルティが実行されます』

同時に彼のPDAと首輪から合成音声の流れ出始める。

『開始から6時間が経過するまで、全てのエリアは例外なく戦闘禁止です。貴方はルールに違反しました……』

黒木

「えっ、ルールって、い、いつたい』

突然のことで激しく動揺する黒木。

香織

(いまのうちに)

その間に香織は黒木に気づかれない様に少しづつだが、距離をとっていく。

黒木

「うわぁーーーーー」

その時だった。黒木の足元の床が開いたのは。

彼が落ちたのは約5メートルほどの大きさの立方体の部屋で、床に5センチほどの穴が無数にあいていた。

ピロリン ピロリン ピロリン ピロリン

その時PDAがアラームを発した。今度は黒木のPDAだけではなく、香織のPDAからも聞こえてくる。

あわてて、PDAを操作すると『ペナルティ』と書かれた項目が増えていた。それは新たに増えた情報を彼らに伝えるためのものだった。

『二ードルルーム・トラップ』

ルール違反者や首輪の解除に失敗した人間を殺すために全域に配置された攻撃システムの1つ。主に1階に配置されている。

首輪が作動した者を床下の部屋へと落とす。その後、床の穴から多数の槍が飛び出してきて落ちてきたプレイヤーを刺し殺す。

槍が飛び出してくるのは落ちてから約1分後。がんばって這い上がってね。

まあ、無理だと思っけど。

黒木

「た、助けて。だ、誰か」

黒木は何とか出ようとするが、床の穴を除けば本当に何も無い部屋である。当然脱出できるわけがなく、1分の時間が経過してしまふ。

ドスッ ドスッ ドスッ ドスッ

床の穴から何本もの槍が飛び出してきて、黒木の体を持ち上げていく。彼の体から流れた血は槍を伝って、床へ溜まっていく。さらに、床に溜まった血は無数の穴に流れ込んでいった。まるで部屋が彼の血を飲んでいるかのように。

香織

「いやあーーーーー」

あまりにも無残なその様子に香織はただそう叫ぶことしか出来な
かった。

分
『

『ゲーム開始より5時間15分経過／残り時間67時間45

第3話（後書き）

この回から殺人ゲーム本格始動。
次の回で主人公たちが合流します。

第4話（前書き）

この小説はシークレットゲームのかりんルートのアフターストーリーになります。

かりんや麗佳は本編には基本的に出てきません。

素人ですのでご指摘があればお願いします。

第4話

司
「いったい、どっちだ」

かれん
「はあ、はあ、このあたりだと、はあ、思っんです、けど」

悲鳴を聞いて慌てて駆け出した二人だったが、悲鳴は一回聞こえたり聞こえてこず、おおよその場所まで来たが、悲鳴を上げた人物と合流することは出来ずにいた。

ましてや、かれんは司のペースに合わせて走ってきたので完全に息が上がってしまっている。

かれん

「はあ、司さん、どうしましょう」

自分たちの知らない所で何か大変なことが起こっている。そのことによって、二人の不安は否応にも無く高められていく。

司

「と、とにかく、誰かと合流したほうがいい」

不安は焦りをよび、焦りは行動を急がせて行く。

かれん

「ですから、どうやって人をさがすかって」

しかし、急げば、急ぐほど目的が果たせなくなるのはこの世の常だろう。

実のところ、二人が当たり前のように殺人を行わせる常識を逸脱した殺人ゲームたるこのゲームに普通の高校生と中学生でしかない二人がすんなりと受け入れて、首輪の解除を目指し、行動することができていたのには理由があった。

いや、それは理由というほど、複雑なものではない。

二人はただ単に気が付いていなかったただけなのだ。今まさに自分たちが参加させられているこのゲームが殺人ゲームであることに。

二人が今までに確認出来たルールは合計6つ。

そこから知ることの出来たのは、

首輪をはずすにはPDAの条件を満たす必要があること

決まられたルールを破ってはいけないこと

PDAは13台であり、おそらくプレイヤーも13人である

こと

13台のPDAのほかにジョーカーのPDAがあること

進入禁止エリアがあり、入らないためには6階を目指さなくてはいけないこと

3日と1時間がたてば賞金がもらえること

戦闘禁止エリアというものがあること

この中には殺人をほのめかすことも書かれていたが、あくまでそれはゲームの首謀者がプレイヤーを殺すというものだった。そのため、誘拐されてきた時点で殺される可能性を考えていた二人にとっては、指示に従っていれば殺されることはないと考え結果となり、むしろ安心する要因になってしまったのだ。

さらには、首輪の解除条件は二人ともただ生き残ればよいというもの。黒木のように殺人が条件になっているものでな無かったため、その上、戦闘禁止のルールまであったため、プレイヤー同士で殺し合いが行われることがあるなどと考えていなかったのだ。

それゆえに、突然聞こえてきた悲鳴は完全に予想外のもので、二人を混乱させるには十分なものだった。

かれん

「司さん、どうして…」

再び司へと問いかけるかれんだったが、司によって言葉を遮られる。

かれん

「どうかしました」

何かあったのかと思い、声を潜めて司へと尋ねる。

司

「話し声がする」

そういわれて耳を澄ませてみると、微かにだが話し声が聞こえる。

かれん

「悲鳴を上げた人でしょうか」

司

「わからない、あそこを曲がった先みたい」

声はどうやら少し先の角の先から聞こえてくるようだった。

司

「とにかく行ってみよう」

かれん

「はい」

近くに人がいることに気付いたことによって、少し落ち着きを取

り戻した二人は声のするほうに向かっていった。

角を曲がった先には大きな穴が開いており、その向こうにはおそらく悲鳴を上げた人物だろう座り込んでいる女性と、その女性に話しかけている青年、二人から少し離れたところに司たちが来た方とは逆の通路を注意深く監視している男性の姿があった。3人はまだ、司たちには気付いていないようだった。

司

「あの人たちに話を聞いてみよう」

通路の真ん中にはあいている穴の脇には人一人が通れるだけのスペースがあり、何とか向こう側にいけそうだったため、司は3人と合流するために近づいていく。かれんのも少し後を付いて行こうとする。

青年

「まった、穴の中を見てはいけない！」

司が穴に近づいたところで、女性と話していた青年がこちらに気付き、制止の声を上げる。

司

「えっ？」

しかし時遅く、司はその穴の中を覗いてしまう。

その直後、司は立っていられずに座り込んでしまい、顔色もどんどん青くなっていく。

かれん

「司さん、どうしました？」

急に座り込んだ司を心配してかれんが近づいてきた。

かれん

「つか・・・、きゃあ」

かれんが来るのを止めようとした司だったが、勢いあまってそのままかれんを押し倒してしまう。

かれん

「っ、司さん？」

かれんは突然の司の行動にどうしたらよいのか分からず、問いかけるが、司はかれんを覆いかぶさったまま、首を振るだけだった。

かれん

「司さん、なにがあっただんですか！」

司

「み、見ないほうがいい……」

かれん

「見るって、いったい何があったんです」

司の動揺ぶりにかれんも声が震えてきている。

司

「ひ、人が……」

かれん

「人、人がいるなら早く助けないと」

穴の中に人がおり、何か重大な事態になっていると考えたかれんは司の下から出て助けようとした。

しかし、司はかれんに覆いかぶさったまま彼女の肩を掴み、その行動を止めた。

司

「違う、居たんじゃない。あつたんだ」

かれん

「あつた？それだと、まるで生きてい……」

生きていない物みたいじゃないか、そう言いたかったかれんだが、司の言葉の意味に気付き、最後まで言うことが出来なくなってしまった。

司

「……………死体、だっただ」

そう、司が見たものは全身を槍で貫かれた少年、黒木の死体であった。

かれん

「……………」

司

「……………」

あまりの事態に二人から言葉はなくなった。

そんな二人に声がかけられる。

男性

「二人とも大丈夫か」

それは、いつの間にか二人の傍に来ていた、男性のものであった。

司

「あつ、はい。大丈夫です」

司はあわてて返事をするが男は何故か顔に笑みを貼り付けていた。

男性

「そうか、ところで、何時までいちゃついているつもりだ」

司

「え？」

かれん
「あっ」

男の言葉で二人はまだ司がかれんに覆いかぶさったままのことに
気付き、慌てて立ち上がる。

男性

「まったく、あっちもいい雰囲気な上にこっちもか。一人身の俺に
対するあてつけか何かか？」

司

「えっ、あの、その、そういうんじゃないくて、」

かれん

「……………」

司は男の言葉に慌てて否定しようとするが、うまく言葉にならな
い。

かれんにいたっては、顔を赤くして、口をただ動かすことしか出
来ていない。

男性

「さて、冗談は此処までだ。さっきの様子だと坊主はあれを見たの
か」

その様子を笑って見ていた男だったが、今までのやり取りは二人
を落ち着かせるためだったのだろう、急にまじめな声に変える。

司

「はい……」

男の様子に司も少し落ち着きを取り戻してそう応える。

男性

「そうか、まあ、嬢ちゃんが見なかっただけでもよしとするか」

男は少し困ったように頭を掻いた。

司

「それで、此处でいたい何が起きたんです」

冷静になった司はこの男性なら何か知っていると考えそう尋ねる。

男性

「ちょっと待て、まずは向こうと合流してからだ」

司

「そうですね、でも下を見ないで渡るのは無理だと思いますが」

他の二人と合流してから詳しく話すという男の意見に賛成する司だったが、穴の向こう側へと行くのが困難だと気付いた。

たしかに穴の脇のスペースは非常に狭く、下を見ないで渡るのはかなり危険そうだった。

そして、下を見るということは必然的に穴の中にある死体を見ってしまうことになる。

かれんに死体を見せたくない以上、向こう側に行くことは出来な
いだろう。

男性

「そつだな、ちょっと待ってる」

そついうと男性は一人で向こう側へと渡っていく。

しばらく青年と話していた男性だったが、話がまとまったのか再
びこちら側にやってきた。

男性

「しばらく行った所で道がつかなくなってきているみたいだ。そこで合流す
ることになった。それでいいか」

司

「はい、問題ないです」

かれん

「私も大丈夫です」

男性

「そつか、じゃあ、こつちだ」

二人の返事を聞くと、男はPDAを見ながら進んで行く。

司たちも慌ててその後を追うのであった。

分

『ゲーム開始より5時間35分経過 / 残り時間67時間25

第5話

男性

「まずは自己紹介からはじめるとするか。

これだけ人が増えたんだ、名前も知らないんじゃないじゃ不便だろう」

司たちはあの場所から5分ほど行った場所で合流し、手近な部屋に入って話し合いを始めていた。

青年

「そうですね、よく考えてみたら、誰の名前も知らなかったですし」

お互いに名前を知らなかったところを考えると、彼らはおそらく事件がおきてから合流したのであって、もともと一緒に行動していたわけではないのだろう。

もしかしたら彼らが着いてから司たちが来るまでにそんなに時間があったわけではないのかもしれない。

青年

「それでは、僕から始めさせてもらいます」

そう言い出したのは女性を励ましていた青年だった。

青年

「僕は長谷川拓哉。大学の2回生。此処へはおそらく大学の帰り道でだと思う」

そこまで言うと、長谷川は一度全員を見渡してから尋ねる。

長谷川

「それで、確認したいんだけど、此処へはみんな誘拐されてきたで合ってる？」

その言葉に全員が首を縦に振る。

長谷川

「やっぱりそうか、となると此処に連れてきた連中はいつ」

男性

「ちょっと待った。そういう話は全員が終わってからにしようぜ」

話が自己紹介から外れそうになるのを見て、男性が長谷川の言葉を止める。

長谷川

「……そうですね、すみません」

長谷川は少し不満そうな顔をしたが、納得したのかすぐにそう謝った。

男性

「なに、そう気にするな。それを考えるのも必要なことだ。さて、このまま俺の紹介に入ってもいいか？」

男性の言葉に長谷川は頷く。

男性

「それじゃあ、やらせてもらうぜ、杉山雅治だ、職業は探偵なんて

ものをやらせてもらっている。此処に連れてこられた状況なんだが、酒を飲んで記憶がないのはいつものことなんで、どこでつてのは、さっぱりだ」

かれん

「探偵なんですか？すごいですね」

自分を探偵だと紹介する杉山にかれんが興味を示す。

杉山

「と言つても、仕事はペット探しとか、浮気調査なんてものばっかだな。」

何か依頼があれば杉山探偵事務所までどうぞってか」

長谷川

「じゃあ、此処から出る方法でも調べてほしいですねえ」

それを聞いた長谷川はそう冗談をいうが、一方かれんは何かを考えているようだった。

司

「どうかしたのかれんちゃん。何か頼みたいことでもあった？」

杉山

「おっ、何かあったか？嬢ちゃんなら安くしとくぞ」

かれん

「えーと、その、姉さんの彼氏のこと調べてもらえるかなって思つて」

女性

「なに、やばそうな奴なの？」

死体を見た後だとは思えないその分秀囲気にだいぶ落ち着きを取り戻したのか、女性も話しに加わってくる。

かれん

「いえ、そうじゃないです。会ったこともないんです。そもそも、絶対にいるとも言い切れませんですし」

司

「？、どういふこと」

かれん

「姉さん、何年か前から時々誰かのことを考えて悲しそうな顔をすることがあるんです」

長谷川

「それがなんで彼氏だと？」

かれん

「前に一度姉さんに彼氏が出来たんじゃなかったって聞いた事があるんです」

杉山

「そのときも悲しそうな顔をしていた、か」

かれん

「……はい」

そのときの様子はあまり思い出したくないことなのか、悲しそうな顔をするかれん。

杉山

「そっか、そういうことなら此処から帰ったら、真っ先に調べてやるよ」

かれん

「ありがとうございます」

杉山の言葉にかれんはうれしそうに応える。

杉山

「次は、姉ちゃんでもいいか？」

女性

「あ、はい、大丈夫です。」

私は工藤香織。高校3年です。此処へは塾の帰り道に」

杉山

「あそこで何があったのか聞きたいところだが先に坊主たちの紹介を済ませておくか。」

酷かもしれないがその後に説明してくれ」

香織

「はい、分かりました」

杉山は返事を聞くと、司たちに合図を送る。

司

「俺は如月司、高2です。学校の帰りに此処に。
それで、彼女は北条かれんちゃん。彼女とは目が覚めてすぐに会
って、それから一緒に行動しています」

かれん

「北条かれん、中学3年です」

杉山

「これで全員終わったな。

悪いが工藤の姉ちゃん、何があつたのか教えてくれ」

香織

「此処で目覚めた私は出口を探し……………」

香織は皆に出会う前に何が起きたのかを話し始める。

杉山

「なるほど、戦闘禁止エリア、ルール違反、そして、ペナルティか」

香織の説明を聞き、杉山は全員を見渡す。

杉山

「そうなるよ、まずやることはルールの確認になると思うが、異論のある奴はいるか」

その言葉に全員首を横に振ることで応える。

杉山

「まずはルール1、おっとこれは必要ないか、2もそうだな。
3のルールを知ってる奴は」

ルールの1と2は全員のパダに記載されているので省き、ルール3から始める。

長谷川

「僕が持ってます。これです」

そう言い、長谷川は自分のパダを見せる。

ルール3

パダは全部で13台存在する。13台にはそれぞれ異なる解除条件が書き込まれており、ゲーム開始時に参加者に1台ずつ配られている。この時のパダに書かれているものが、ルール1で言う条件にあたる。他人のカードを奪っても良いが、そのカードに書かれた条件で首輪を外すのは不可能で、読み込ませると首輪が作動し着用者は死ぬ。あくまで初期に配布されたもので実行されなければならぬ。

司

「やっぱり、参加者は13人いるみたいだね」

かれん

「そうですね」

香織

「やっぱり？何か知ってたの？」

そのルールを見て、自分たちの推測が正しかったことを確認する
司とかれん。

その様子を見て、香織が疑問を持ち尋ねてくる。

司

「俺達の知ってるルールの中にそう判断することが出来るものがあったんです。」

「そういえばちょうどルール4だったよね、かれんちゃん」

かれん

「はい、これです」

そのルールが次のルールだったため、そのままルールをみせる。

それはジョーカーについて書いてあるルールだったがPDAが13

台あると書かれていた。

香織

「なるほどね、ジョーカーってそういうものだったのね」

かれん

「知ってたんですか」

香織

「私のPDAのジョーカーを破壊することだったの。

何のことだか分からなかったから助かったわ」

そう言っつて香織は自分のPDAを皆に見せる。

2のPDA・・・JOKERのPDAの破壊。このPDAのみ半径1m以内でJOKERの偽装機能は無効、初期化される。

杉山

「なるほどな、じゃあ、この中に持つてるやつがいれば、工藤の姉ちゃんの首輪はずせるわけか、持つてるやついるか？」

ちなみに俺は持つてない」

長谷川

「僕は持つてないですね」

司

「俺達も違いますね」

香織

「そうですか、此処で首輪がはずせたらよかったんですが」

長谷川

「まあ、仕方ないことだよ、それよりも次のルールに行こうか」

司

「俺が持ってますね。」

ルール6も持ってるんで一緒に見てください」

そう言っつて司はPDAを見せる。

5は進入禁止エリアに関するルール、6は賞金のルールである。

杉山

「賞金20億を山分けか、厄介なルールだな」

長谷川

「厄介？どちらかと言うと良いルールだと思いますが」

深刻な表情をする杉山は長谷川は疑問を口にする。他の皆も同じように思っているのだろう杉山の回答を待っていた。

杉山

「いや違う、山分けてのがミソだな。例えばこのまま12人生き残ったとすると賞金はいくらだ」

かれん

「?????1億7千万くらいです」

杉山

「そうだな、じゃあ今度は生き残ったのが一人だけだとしたら」

司

「それはもちろん、にじゅう……」

そこまで口にして司にもそのルールの本当の意味が理解できた。長谷川と香織にも理解できたのだらう複雑そうな顔をしている。

かれん

「どういうことですか？」

まだ一人理解し切れていないかれんが尋ねる。

杉山

「人が1人死ねばその分賞金は増える。つまりはPDAの条件に係なくても人を殺すやつも出てくるかも知れねえってことだ」

司

「けど、ほんとに賞金が出るかも分からないのに、わざわざ人を殺すなんてことする人が居るとは思えないんですが」

杉山

「そうでもないだろ、それに少なくとも俺は信じてるぞ」

長谷川

「何でそう思うんです」

杉山

「別に何の根拠もねえよ。
ただ、そう思わなきゃ、こんなゲームやってられないだけだ」

香織

「それでは、私達を殺すつもりがあるということですか」

「そういつて杉山を睨み付ける香織。」

杉山

「そう睨まないでくれ、殺すつもりなんてねえよ。
だいたい、このままでも1億以上手に入るんだ。俺にとってはそれで十分な大金だよ。」

「それより、次のルールに行こうぜ」

その様子には杉山は慌てて弁解する。

香織

「それなら私が持ってます」

「一応納得したのか、杉山から視線を離し、自分のPDAを取り出す。」

ルール7

指定された戦闘禁止エリアの中で誰かを攻撃した場合、首輪が作動する。

司

「やっぱり、彼はこのルールを破ってしまったんでしょっか」

司もルール7の詳細を知っていたため香織の話を知ったときから黒木が違反したルールはこれではないのか考えていたのであった。

長谷川

「いや、多分こっちのルールなんだろう」

しかし、長谷川はそれを否定した上で、PDAをみんなに見せる。

ルール8

開始から6時間以内は全域を戦闘禁止エリアとする。違反した場合、首輪が作動する。正当防衛は除外。

香織

「確かに、こっちの方があってるみたいね」

香織はあの時に首輪から流れた合成音声を思い出し、頷く。

かれん

「じゃあ、2階以上には無いんでしょうか」

司

「あるはずだよ、じゃないと、ルール7は必要ないはずだ」

ルール8にも戦闘した場合のことも書いてあるので、もし2階以上に戦闘禁止エリアが無ければルール8だけでよくルール7がある理由がない。そのため司は2階以上にも戦闘禁止エリアは存在していると考えたのである。

長谷川

「じゃあ、次に行こうか。」

9番目のルール誰か知ってる」

長谷川がそう尋ねるものの、全員首を横に振るだけで、誰もPD Aを出そうとしない。

杉山

「誰も持っていないのか。」

最後のルールだったのに、残念だったな」

長谷川

「まあ、しかたありませんよ。」

所で杉山さん、さっきから何をしてたんですか」

ルールを確認し始めた頃からメモ帳に何かを書き込んでいた杉山

に長谷川は疑問を投げかける。

杉山

「ああ、ルールを全部書き出していたんだ。
ちよつど書き終えた所だ全員もって言ってくれ」

そついつてメモ帳から4ページ破いて、全員に配る。

かれん

「5枚分も書いていたんですか！
書くの早いんですね」

かれんはこの短時間に5人分もかいていたことに驚く。

杉山

「まあ、ちよつとした特技ってやつだな。この仕事をしてると自然と身につくんだ。」

そんなことより、これからどうする」

香織

「すみませんが、此処からは一人でやらせてもらいます」

これからどうするかを決めようとした杉山だったが、香織は突然一人で行動すると言い出す。

司

「なに言ってるんですか、一人は危険ですよ」

かれん

「そうですね、人を襲おうとする人もいるかもしれないんですし」

慌てて、香織を止めようとするが、

香織

「そういう人がこの中にいないと言い切れますか」

全員

『……………』

香織の言葉に皆何も言えなくなってしまふ。

その間に香織は部屋から出て行ってしまふ。

杉山

「俺が追いかける。長谷川たちは此処で待っていてくれ。

30分、いや10分だ、10分経っても戻らなっかたら先に行つてくれ」

長谷川

「分かりました」

そういうと杉山は香織を追って、部屋を出て行ってしまい、部屋には司とかれん、それと長谷川が残される。

長谷川

「とりあえずやれる事をやっておこうか

PDAの番号を聞いてもいいかな。僕のはPDAは6、ジョーカ
ーを5回使う事が条件だ」

長谷川の言葉に司とかれんはお互いの顔を見た後頷きあふ。

かれん

「分かりました。私のはクイーン、最後まで生き残ることが条件です」

司

「俺のはジャック、条件と一緒にいた人が生き残っていること。ですので最後まで生き残れば二人とも首輪は外せます」

長谷川

「それじゃあ、今の所しないといけないことは無いわけだ。なにか考えはあるか？」

長谷川は何か次にやろうとしていることはないかと尋ねる。

司

「実は此処に来る前はエレベーターを目指していたんです」

長谷川

「エレベーターを、何でまた？」

司はバツ印の階段が塞がっていたこと、なのでエレベーターがどうなっているのか知っておきたいことを話した。

長谷川

「なるほど、それはいえてると思う。」

エレベーターに行くには部屋を出て、右の方向か」

長谷川はPDAを取り出して、エレベーターへの道順を調べ始める。

その時だった、

ピロリン ピロリン ピロリン

突然PDAからアラームが鳴り出した。

『開始から6時間が経過しました。お待ちいたしました、全域での先頭禁止の制限が解除されました!』

PDAにはそのように書かれていた。

長谷川

「戦闘禁止解除か。杉山さんが出て行ってからまだ6分しか経っていないが此処にいるのは危険だな。」

僕は出て行くことと思う。君達はどうする」

司

「そうですね、でも、もう少し待ってみようと思うんだけど、かれんちゃんはどう思う?」

さすがに一人で答えを出せる物でもないのかれんに相談する。

かれん

「私も残ったほうがいいと思います。」

杉山さんもこれを見て引き返してくるかもしれせんし」

長谷川

「そうか、じゃあ悪いけど先に行かせて貰うよ。
エレベーターの方へは慎重に向かうつもりだから時間になっ
てすぐに来れば追いつけるはずだ」

司

「わかりました」

かれん

「気をつけてください」

長谷川

「そっちこそ、また会おう」

そう言つと長谷川は部屋を出て行った。

そしてそのまま左の方向に進んでいった。

『ゲーム開始より6時間 3分経過/残り時間66時間57分』

第5話（後書き）

この回の内容次第で展開が大きく変わってしまうから大分悩みました。

執筆時間はなんと4話の約3倍。

果たして、杉山は戻ってくるのか、長谷川の行動の真意とは。次回をお楽しみください。

第6話

かれん

「長谷川さんはもう、行ったんだと思います?」

司

「分からない、けど合流することは難しそうだね」

長谷川と別れた後、司たちはしばらく杉山達も戻ってくるのを待っていた。

約束の時間まで待ったが杉山も香織も戻ってこなかったため、先に部屋を出た長谷川に追いつくためにエレベーターを目指すことにしたのである。

しかし、部屋からこのエレベーターに着くまでの間に長谷川に会うことは出来ないでいた。

かれん

「どうしましょう、司さん」

司

「上に行こう。もし長谷川さんが上に行ったとしたら此処で待っていたら、ますます長谷川さんと合流することは難しくなると思う。それに、まだ来てないとするとエレベーターを諦めて階段で行く可能性だってある。」

長谷川は真っ直ぐにエレベーターを目指すと司たちに伝えていた。

そのため、司はもし長谷川がエレベーターに来ていないとしたら、何らかのトラブルに巻き込まれた可能性が高い。

そうになると、エレベーターを諦めて、階段で2階に上がろうとするかもしれないと考えたのだ。

そして、その場合も此処で待っていても、長谷川と合流することは出来ない。

ならば、自分達も2階に上がったほうが合流出来るだろうと考えたのである。

かれん

「そうですね、分かりました」

意見が纏まったところで、二人は改めてエレベーターを調べてみる。

エレベーターの扉は十分に大きく、13人の参加者が全員乗ったとしても大丈夫な広さがあると推測することが出来た。

扉の上には籠が何処にあるのかを示す数字が1から6まで並んでおり、すでに誰かが行ったのか、それともまだ誰もエレベーターを使っていないのか、籠は4階にあると表示されていた。

また、扉の右にはエレベーターをよぶ為に使うのだろう丸いボタンが設置されていた。

司

「じゃあ、押してみるね」

司はボタンを押した後何かあってもいいようにエレベーターから少し離れた所に立っているかれんの下に戻る。

チーーン

しばらくすると、聞きなれた音と共にエレベーターの扉が開く。

司

「さすがに、6階には行けないか」

司は先に籠の中に入り、かれんが入ってきたのを確認してから、6階のボタンを押してみるが、何も変化は起こらない。

続いて、5階から順にボタンを押していく。

変化が起きたのは2階のボタンを押したときだった。

ボタンがオレンジ色にひかり、扉が閉まる。

籠が上昇を始め、2階へと到着すると再び、扉は開く。

かれん

「1階づつしか移動できないんでしょうか？」

司

「どつだろつ、とりあえず、もう一度試してみるね」

そういつて、司は再び6階から順ボタンを押していくが、今度は1階までの全てのボタンを押し終えても何も起こらなかった。

司
「反応なし、と」

かれん

「やっぱり、だめですか？」

司

「まだ分からないよ、次は一度降りてから」

そういつて、司はエレベーターから降りる。かれんもそれに続く。

二人が降りてしばらくするとエレベーターの扉が閉まった。

司

「さて、もう一回呼んで……ありゃ」

かれん

「ボタン、ありませんね」

一階では扉の右側にボタンが付いていたはずなのに、この階には付いておらず、エレベーターを使うことは出来ないようになっていた。

司

「仕方ない、エレベーターは諦めるか。

それじゃあ、この後どうしようか？」

かれん

「どうするって言われても、階段を目指す以外に無いと思うんです

けど」

司

「そうなんだよねえ」

現在のところ司達の目的は3つある。

1つ目、今いる階が進入禁止エリアになる前に上の階へと上ること。
と。

2つ目、長谷川や杉山、香織と合流すること。

3つ目、司たちがまだ知らない9番目のルールを確認すること。

しかし、2つ目、3つ目を達成するための具体的な方法が無く、上の階を目指す途中で運良く誰かと出会うしかないのである。

司

「まあ、このまま此処に居ても仕方ないし、階段を目指すそうか」

かれん

「はい」

そうして、二人は階段を目指して、進んでいく。

かれん

「それで、姉さんだったら、いつまでたつても私のこと病人扱いするんですよ。」

もう、体だって大分健康になつたつていうのに」

司

「それは仕方ないよ。実際、病人だつたんだし。」

それにそれだけ大事にさせてるなんていいことじゃない」

かれん

「それは分かってます。」

麗佳さんにも言われてますし」

司

「麗華さん？」

司はかれんの口から聞き覚えのない名前が出てきたので聞き返す。

かれん

「麗華さんは私達姉妹を面倒見てくれている人ですごくきれいで優しい人なんです。」

私の手術費を出してくれたのも麗佳さんなんです」

司

「手術費を出してくれたなんていったい何をしている人なの」

かれん

「なについて、普通に大学に通ってますよ」

司

「じゃあ、大学生なの！」

多額の手術費を出してくれた人だと聞いた司は麗佳のことを何かの企業の社長だろうと推測していたため、大学生だと聞いて驚く。

司

「ってか、大学生なのに簡単に手術費を出すなんておかしいでしょ！？」

「いったい何処からそんな大金が」

かれん

「さあ」

司

「さあって……」

「いいの？そんなんで」

かれん

「実際、私も何度も聞いてみたんですけど、姉さんも麗佳さんも教えてもらえないんですよ。」

「なんで手術費を出してくれたのか、そもそも、何処で二人が知り合ったのかも」

司

「うーん、何か教えられないような秘密があるって事かな？」

かれん

「そつだと思ひます」

司はとても興味深そうにかれんに尋ねるが、当のかれんの返事はとてもそつけないものだった。

司

「なんだか不満そつだね」

かれん

「それはそつですよ。何で教えてくれないかも分からないんですよ。何かとんでもない事をして稼いだんじゃないかって考えたこともあるんですから」

司

「とんでもないことって例えば銀行強盗とかつだったりし……」

かれん

「……」

司

「……えーと、かれんちゃん？」

かれん

「……」

司

「そつ、そつだ、大金って言ったらこのゲームの賞金。」

かれんちゃんはどう思う」「

「どうやら銀行強盗という言葉はかれんにとってタブーにだった様で司をにらみつけるかれん。」

司はその視線に耐え切れずに慌てて話題を変える。

かれん

「えっ、いきなりどうしたんですか？」

司

「もし本当だったら、手術費を返せるんじゃないかって思ったただけだよ。」

で、どうつなの、信じられるとおもっ?」「

かれん

「……………実は、正直に言っちゃうと信じたくないんです」

司

「信じたくない!?信じられないじゃなくて?」

かれんは少し迷った後、申し訳なさそうにそう応える。

その応えに司は驚愕する。

それもそうであろう。

信じられないなら分かる。20億という大金など普通に生活しているのならば持つことのない学である。そんな大金を簡単に出すなどと考えにくいからだ。

他にも、そもそも誘拐犯が生かして帰してくれる保証がないなど、信じられないと応える理由はいくらでもある。

しかし、かれんは信じられないではなく信じたくないと言った。

「信じたくない」

その言葉が意味している事はおそらく1つしかないだろう。

それはつまり、かれんは賞金などあつてほしくないと考えているということである。

かれん

「麗華さんみたいに人のためにお金を使ってくれる人も居るんです。それなのにこんなことにお金を使う人たちが居るなんて思いたくもないんです」

かれんの言葉に司はショックを受ける。

その理由は2つ。

1つは、かれんが此処まで怒ると思わなかったため。

司がかれんと出会ってから数時間しか経っていないが、司はかれんは自分のことよりも先に相手のことを考えることの出来る優しい性格の持ち主だと考えていた。

もちろん、それはかれんが怒ることを知らないと思っている訳ではない。

実際に、かれんは司に対して怒ったり、姉への不満をこぼしていた。

しかし、このように相手に憎しみをぶつける事は無いと思っていたのである。

そしてもう一つは、純粹に賞金を楽しみにしていた自分が恥ずかしくなったのである。

もちろんそのこと自体は別に非道なことではない。むしろ正しいことと言っても過言ではない。

自分の死を想像出来ないでいる司にとって生き残るといふ目的だけでこのゲームを勝ち残る事は困難である。そのため、賞金を期待することでモチベーションを高めることは必要なことなのだ。

だが、目の前の少女は自分と同じ状況に居るにもかかわらず、賞金を受け取ることを拒もうと考えているのだ。そんな彼女と比較してしまうと自分がとても欲深い人間に見えてくるのだ。

しかし、同時に司はかれんに何か目的となるものが必要であることも理解していた。

長い間病氣と戦ってきたかれんは司と違い自分の死を想像することが出来る。そのため生き残るといふ目的でモチベーションを保つことは出来る。

しかし、そのためには常に自分の死を想像していなければならぬ。しかし、人の精神はそれに耐えられるほど強いものではない。

だからこそ、司はかれんにある提案をすることにした。

司

「それならなおさら賞金を手に入れてその人に返すべきだよ。そうだ、いつそ俺の賞金も貰ってもらおうかな」

かれん

「えっ、どういふことですか」

司の言葉に今度は逆にかれんが驚く。

司

「だってさ、その人はお金を正しいことに使うことが出来るんですよ。」

そうすれば誰かが助かるかもしれないし」

かれん

「司さんはそれで良いんですか」

司

「特にお金が必要な理由があるわけでもないしね。それだったら正しく使ってくれる人にあげちゃった方が良いかなって。」

それとも、かれんちゃんは俺がそんなに強欲だと思ってた？」

かれん

「そ、そんなことはないです」

司の言葉にかれんは大きく首を横に振って否定する。

司

「じゃあ、何も問題ないね。」

俺達の目的は生き残って麗華さんにお金を返すってことで

かれん

「はい!!」

かれんは本当にうれしそうに頷く。

ちようどそのときだった。

????

「おーい、その人たち」

二人の後ろから声をかけられたのは。

分

『ゲーム開始より7時間38分経過 / 残り時間65時間22

第6話（後書き）

2週間ぶりの投稿です。GW中はバイトしたり、ゲームしたりしてました。

そういえばFLAT新作うたてめぐり発売まで1ヶ月経りましたねー。体験版プレーしましたがドラマチックモード主人公のセリフまで消えるっていったい・・・

それはそうと、今回の話は2階への移動と、目的の確認です。2階への移動のほうなのですが、ゲーム中にはほとんど登場していませんのでエレベーターの設定を勝手に作りました。

エレベーター設定

- ・エレベーターは建物内に2基設置させている。
- ・エレベーターは片方は奇数階、もう一方は偶数階から乗り込むことができる。

- ・エレベーターは今居る階の1つ上、もしくは1つ下の階に行くことができる。

- ・一度乗り込んだ場合、全員（荷物も含む）が降りるまで扉は開いたままで、他の階でボタンが押されても移動することはない。

以上のようになっています。もし、矛盾があつた場合速やかに連絡くださるか、無かつたことにしてください。

さて、最後に少しだけ出てきた人物は果たして何者なのか、敵なのか、それとも味方なのか。

次回をお楽しみください。

第7話

男性

「しかし、どうしたのか」

時間は数分前に戻る。場所は建物2階の廊下。此処にもまた、一人歩くプレイヤーの姿があった。

男性

「今まで誰とも出会えないとはさい先悪いな」

どうやら彼は此処にくるまでに誰とも会わなかったようだ。

男性

「死体があったということはもう殺し合いが始まっている様だが・・・、

ん、「

そんなことを考えながら歩いていると、何処からか話し声が聞こえてきた。

???

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

???

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男性

「話し声か、この感じだと争っているわけではなさそうだな。」

よし、行ってみるか」

男性は声のする方へと足を進めていく。

しばらくすると男性は二人の男女の姿を見つけることが出来た。

青年

「それ・・・なおさ・・・金を手に・・・の・・・返す・・・よ。
そうだ、い・・・の・・・も貰・・・もら・・・な」

少女

「えっ、ど・・・こと・・・か」

彼らは男性には気がついていないらしく、会話を続けていた。

男性は二人に気付かれないように近づいていく。

青年

「それとも、かれんちゃんは俺がそんなに強欲だと思ってた？」

少女

「そ、そんなことはないです」

近づいていくと二人の会話は鮮明に聞き取れるようになった。

男性

「賞金目当てに人殺しをするタイプには見えないな。
だとすれば、本当に信頼しているといったところか。ちょうどいい。」

おーい、その人たち」

そう呼びかけながら男性は二人に近づいていく。

男性

「よかった。今まで誰とも会えずにいて、困っていたんだ。

君達は此処が何処だか知っているのか？」

青年

「すみません、俺達も此処が何処だか知らないんです。失礼ですが、貴方は？」

此処にはやはり誘拐されてきたんですか？」

男性

「ああ、すまない。俺は岩崎健太という。取引先に向かっていたはずだったんだが、気がついたらこんな所に居た。

そういう君達は？」

青年

「俺は、如月司です。そして、彼女は北条かれんちゃん。

俺達もそれぞれ誘拐されてきたみたいで此処で出会って、それから一緒に行動しています」

かれん

「北条かれんです。よろしくお願いします」

司の紹介と一緒に居たかれんも岩崎に挨拶をしてくる。

岩崎

「こちらこそよろしく頼む。」

それにしても何も知らされずに集められた人間が3人か、いったい俺達を集めていったい何をさせる気なんだ」

かれん

「いえ、3人じゃないですよ。全員で13人です」

岩崎の言葉をかれんはすぐに否定する。

岩崎

「13人？どういうことだ」

司

「PDAのルールにそうあったんです。

俺達は岩崎さんに出会う前にも3人と出会ってます。それと那些人達以外に一人死んでいることも分かっています」

岩崎の疑問にかれんの代わりに司が応える。

岩崎

「死んでるって、いったいどういう事だ」

司

「実は、……………」

岩崎

「そうか、そんなことがあったのか。」

それじゃあれはそういうことなのか」

かれん

「あれっていったい何ですか？」

岩崎

「実は、二人に会う前にいくつかの部屋を調べてみた時に見つけたんだが、どうしたものか、此処で説明してもいいが。いや、それならあそこに戻ったほうがいいか。悪いが一緒に来てもらってもいいか」

司

「どのくらいかかるんですか」

岩崎

「そうだな、確か10分くらい前に見つけたはずだ。それから真っ直ぐに此処に来たから大体その位かかるな」

かれん

「司さん、どうしましょうか？」

司

「うーん、やっぱり少しでも情報は多いほうがいいと思うし、付いていった方が良いんじゃないかな」

かれん

「そうですね、分かりました」

司の意見を聞いたかれんはその意見に同意する。

司

「それじゃあ、岩崎さん案内してもらって良いですか」

岩崎

「分かった、こっちだ付いて来てくれ」

そういつて歩き始める岩崎、司とかれんもそれに続く。

司

「そういえば、岩崎さんは何番のルールを持っていたんですか？」

岩崎

「ああ、俺のは・・・」

司

「どこですか」

岩崎

「ああ、そうだ。あの箱の中に入っていた」

岩崎に案内され、司たちはある部屋へとやってきていた。

そこは間取り自体は今までの部屋とあまり変わりなかったが、唯一つ、部屋の中にはいくつかの木箱が他の部屋との違いだった。

かれん

「あれ、この箱埃が積もっていませんよ」

司

「えっ、本当だ」

今まで司達が見てきた家具は全て埃が積もっていたし、この部屋の床にもうっすらと誇りが積もっている。

しかし、木箱にだけは不自然なことに埃がほとんど無く、何処となく新しいように見えた。少なくとも他の家具と一緒に置かれたということはないだろう。

司

「開けてみても良いですか」

司が尋ねると岩崎は問題ないと言っように頷く。

箱を開けてみるとそこには非常用の食料や、コンロや鍋、水などが入っていた。

司

「はは、本当に此処で三日間過ごせって事が」

かれん

「司さん、それなんでしょう?」

司がそんなことを考えていると、一緒に箱の中を覗き込んでいたかれんが話しかけてくる。

かれんが指差す方を見てみると、食材の入った袋と袋の間に何か置いてあった。

司が手にとってみるそれはマッチ箱程度の大きさのプラスチックの板で、側面には金属製の端子が付いていた。

司

「何なんだろうこれ?」

岩崎さん、これがさっき言ってたものですか?」

そういつて振り返った司がみたのは、コンバットナイフという種類になるのだろうか。大振りのナイフを今にも自分に振り下ろそうとしている岩崎の姿であった。

司

「!?!」

司が咄嗟にかわしたためナイフは司には当たらずに木箱に打ちつけられる。その音で事態に気が付いたかれんは慌てて岩崎から距離をとり、司も守るようその前に立つ。

岩崎

「ちっ、外したか。あのまま、箱に夢中になってればよかったものを」

かれん

「い、岩崎さん、それはいつたい」

岩崎

「ああ、これか？実はな、此処で見つけたものってのはそんなによく分からないおもちゃじゃなくて、これのことなんだ」

岩崎は再びナイフを司たちに向けつつそう言う。

司

「い、いつたい、どうして」

岩崎

「お前達が教えてくれたんだろ。生き残りが少なくなれば賞金が増えるって」

確かに司達は此処に来るまでに岩崎と情報を交換していた。当然その中の賞金に関わるルールも教えていた。

司

「それじゃあ、首輪を外す為じゃないとでもいうんですか？」

岩崎

「ああ、首輪を外すのに別に人を殺す必要なんて全くないさ」

岩崎はあっさりと肯定する。

かれん

「じゃ、じゃあ、いったい何の」

岩崎

「特に理由があるわけじゃないさ。ただ、せっかく貰えるんだ、どうせなら賞金は多く貰いたいと思うのが人情ってもんだろ」

かれん

「そんな……」

いったい何のためにお金が必要なのか　そう尋ねようとしたかれんだったが、最後まで聞く事もせずに出された岩崎の返事に言葉を失ってしまふ。

司

「それでこれからどうするんですか

こっちは二人いるんです。いくら武器を持っているといっても1対2じゃ勝ち目はうすいと思いますけど」

岩崎

「二人って言うても一人は女の子、こちらのほうが優勢じゃないのか？」

司

「そうですか、じゃあ何でこんな回りくどいことしたんですか」

岩崎は司たちと出会ってすぐには襲ってこずに、わざわざ此処まで連れてきて不意打ちをしようとしていた。それはナイフだけでは勝つのは難しい判断した、少なくともこの状況になることを岩崎は

望んではないだろう、そう考えた司は岩崎にひくように提案する。

岩崎

「俺はこのまま戦ってもいいんだが」

司

「……………」

岩崎

「まあいいか、別に俺が殺さないといけないというわけでもないしな
それじゃあ、せいぜい長く生き残れることを祈ってるぞ」

そう言い残し岩崎は司達にナイフを向けたまま慎重に部屋から出て行く。

かれん

「助かったんですか？」

司

「そつみただね」

おそろおそろ尋ねるかれんに司も半ば啞然とした様子で応える。

司

「できれば移動したほうがいいと思うんですけど、大丈夫？」

かれん

「ごめんなさい。安心したら腰が抜けちゃって……」

かれんは申し訳なさそうに首を振る。

司

「そんなに気にしなくて良いよ。俺もかなり限界近いし。

このあたりで少し休憩して、それから安心して休める場所を探そう」

かれん

「安心できる場所？そんな所あるでしょうか」

安心できる場所なんて本当にあるのだろうかそう思ったかれんは司に尋ねる。

司

「ルールに先頭禁止エリアってのがあっただろう。そこに行けば少なくとも襲われることだけははずだよ。

とにかく今は少し休もう」

そういつて司は壁に背をもたれて座り込む。かれんも司の言葉に安心したのか、司の隣に同じ様に座わって、休憩を取る。

しかし、この数時間あまりにも多くのことが起こった為、予想以上に疲れがたまっており、10分もしないうちに二人とも眠りにおちてしまうのだった。

分
』

『ゲーム開始より8時間 6分経過/残り時間64時間54

「ええ、そうです。それで貴方に対処をお願いしたいんです」

とある部屋 管理室か何かだろうか、壁には多くのモニターが並んでいる 一人の男性の声が響いていた。

「いえ、今SMを動かすのは難しいですね。今回のゲームにはファ
サブマスター

ントムが参加していますから、それまでに目標に合流する必要が
あるんです」

「どうやら男は電話で話をしているようで部屋には男以外の姿はな
かった。」

「それなら可能です。こういったエクストラゲームにしましょうか」

「会話には何か重要なものであろう専門用語がいくつか混じってい
た。」

「はい、分かりました。それではそのように。」

「ええ、大丈夫です。後始末はこちらが。」

「ではお願いします。」

そこで電話を切り、男はあるモニターに視線を向ける。

そこには並んで眠る男女の姿が映し出されていた。

第7話（後書き）

久々の投稿です。学校のほうが忙しくて全然手をつけずに、気がついたら2ヶ月近くたっていました。

さて今回はストーリーに重要なキーワードを出しました。SMのほうは知らない人は少ないと思いますが、ファントムのほうはオリジナルの設定です。詳細を明らかにするのはクライマックスに突入してからになると思います。

あと、6話のエレベーターの間違いがあつたため表記を少し変更しました。まさかあんなところでエレベーターが出ていたなんて・
・
次回はもう少し早く投稿できたらいいなと思ってます。
では次回をお楽しみに。

第8話

かれん

「次はどつちにいけばいいですか？」

司

「えーと、ちょっと待って、今が此处で、階段がここだから・・・
うん、次を左にまがったら暫くは真っ直ぐだね」

結局、司たちが目覚めたのは7時を過ぎた後だった。

昨日の岩崎に襲われたのが大体9時ごろだったため、10時間もの間眠っていたことになる。

その後、木箱の中に入っていた食材を使って朝食（二人とも昨日から何も食べていない為、朝食といってもその量はかなり多くなっている。）を食べ、こうして階段を目指して行動している。

昨日目指す予定であった戦闘禁止エリアではなく階段ではないのは長時間無防備のまま眠っていたのになにも起こらなかった為、この近くには誰もいないのではないかと判断したのと、そもそも戦闘禁止エリアは休息をとる為に目指していたので、しっかり眠ってしまった今となっては特に目指す必要がないためである。

かれん

「司さん、長谷川さんたちは大丈夫でしょうか」

司

「きつと大丈夫だよ。少なくとも岩崎とは出会っていないはずだ。」

それよりも今は階段を目指すことを考えよう」

岩崎に襲われてから今までの間司たちは誰とも出会っていない、それはあの時に近くには岩崎を含めた3人以外にプレイヤーは居なかったのだろう。それに建物の中なので昼か夜かの違いは無いといつてもこの数時間の中に全員が少なからず休憩を取っているはずだ。なので、岩崎が矛のプレイヤーと出会っている可能性まず無い。

かれん

「そうですね、それじゃあ急ぎましょう」

そう云うとかれんは曲がり角まで走っていく。

しかし、そこで何故か立ち止まってしまった。

司

「かれんちゃん、どうかしたの？」

かれん

「司さん、此处を左でしたよね。右じゃなくて」

司

「？ そのはずだけど」

かれん

「ですよ、でもこの先行き止まりなんです」

司

「えっ」

それを聞いて慌ててかれんの所まで急ぐ。

確かに角を曲がった先は20メートルほどで行き止まりになっていた。

司

「確かに此処でいいはずなんだけど」

司はPDAを取り出して地図を見ているが、やはり地図上では此処に壁は存在していないことになっている。

かれん

「行ってみましょうか？」

司

「そうだね、此処にいてもしょうがないし」

二人はとりあえず行き止まりまで行ってみることにした。

司

「これ壁じゃなくてシャッターみたいだな」

近づいてみるとそれは周りの壁とは明らかに違うものであるということが分かった。

更に調べようと司が手を伸ばしたその時

ピロリン ピロリン ピロリン ピロリン

いきなり司とかれん、浸りのPDAがなり始めた

慌ててPDAを取り出すと其処にはいつもの画面は無く、「エクストラゲーム」の文字が大きく表示されていた。

かれん

「エクストラゲームって何でしょう？」

司

「さ、さあ？」

二人は何が起きたのか理解できずに呆然とその画面に見入ってた。

たっ たらっ たらっ たらっ た、 たっ たらっ た たっ たらっ た

しかし、呆然としている二人のことなどお構いなしに画面は更に変化していく。

画面の右端から、ハロウィンで良く見かけるカボチャの怪人が姿を見せたのだ。

その怪人は3頭身でアニメ調にデフォルメされており、まるっこい手足をくねくねと動かして踊るように画面の中央までやってきた。

????

『お楽しみっ！エクストラゲーム!!』

カボチャの怪人は画面の中央で高らかにそう宣言した。

スピーカーからは実際に声が流れ、同時に喋った内容が漫画のように噴出しになった表示がされている。

???

『こんにちは！ ぼくの名前はジャックオーランタンのスミス！』

かれん

「ジャックオーランタン？」

司

「何でハロウインのカボチャなんか？」

スミス

『二人とも、調子はどうだい？ あと4時間と少しでこのゲームが始まってから24時間、つまり全体の3分の1が終わるわけだけど、ちゃんと楽しめているかい？』

かれん

「楽しむってそんな・・・」

PDAから流れ続けている音楽のスミスの口調もこの場にはふさわしいとは思えない陽気なものだった。だからこそ司たちは嫌な予感をぬぐえずにいた。

しかしスミスはそんな二人に気がついているのか、いないのか、気に留めた様子もなく話を進めていく。

スミス

『突然見せ付けられた人の死、はぐれてしまった仲間とは合流したいけどなかなか出来ない、そしてそんな中で騙し襲ってきた男性。君達もこれまでにいろんな体験をしてきているよね。本当に今回のゲームはなかなか展開が速くてとーってもおもしろいよ』

そう云ってスミスは画面の中ではんざいを始める。おそらく喜んでいると伝えたいのだろう。

ところが、スミスは唐突に万歳を辞めると今までと打って変わって急に深刻そうな表情を浮かべた。

スミス

『だけど、この急展開のせいで一つ問題が起こっちゃっているんだよねー。えっ、いったい問題って何かって？うーん、本当なら教えないほうがいいんだけどどうしようかなー。うん、何も教えないでこっちのお願いだけ聞いてもらうのも気が引けるし特別に教えてあげる。他の人たちには絶対に教えちゃ駄目だからね』

かれん

「問題って、何が起きてんでしょうか？」

司

「さあ、分からない。ただ、どう転んでも俺たちにとっては悪いことにはかならないような気がするよ」

ようやく冷静に物事を考えられるようになってきた二人だったがスミスの言いたいことはあまり理解できていないようだった。

スミス

『実はあまりに展開が速いもんだから、みんなの進むペースにバラつきが出て来ちゃっているんだよね。早い人はすぐにでも4階に行っちゃいそうだし、遅い人だと2階に上がってくるまでにまだまだ時間がかかりそうなんだー。このままじゃゲーム終了間近まで何も起こらないまま時間だけが過ぎちゃうなんてことも起きかねない。』

そんなことはぼくとしては断固阻止したいんだよねー』

説明しながらもスミスは両手を広げて画面を塞いだり、遠くの誰かを呼ぶようなジェスチャーを試みたりと忙しなく動いていた。

スミス

『だから、ぼくは4階へ上がる階段にシャッターを下ろして一時的に通行禁止にしたんだ。といってもいつたどの位の時間封鎖しておけばいいのか分からないだよねえ。そこでそれを君たちに決めてもらおうってわけ。ここまでは理解できたかい？』

司

「ああ、大丈夫だ。それで俺達は何をすればいいんだ？」

そう応える司の横では同じ意見なのだろうかれんが頻りに首を振っている。

スミス

『オーケー、オーケー、そんなに急かさなくてもこれからちゃんと説明するよ。まずはこれを見てほしい』

スミスがそういっていると同時に、画面が地図に切り替わる。

地図は先ほどまで見ていた司たちが今いる一帯のものだったが、先ほどとは違い地図上ではいくつかの赤い光点が点滅していた。

スミス

『その赤い光点の表示されている場所にはそれぞれシャッターが下ろされている。そして、ちょっと広いから分りにくいかもしれないけどそのシャッターを開けないことにはこのエリアから出ることに

は出来ない』

そういわれて地図をよく見てみると確かに移動できる区間は限られているようだった。

もつとも、限られているといってもその区間は広く2階全体の4分の1もの広さがあり、司も光点を1つづつ辿っていきその事実には気付いたほどだ。

スミス

『そこで君たちには此处を目指してもらいたい』

今度は区切られた区間のほぼ真ん中にある部屋に赤い光点表示された。その光点は今までのものと違い点滅ではなく点灯していた。

スミス

『この部屋に行ってPDAを操作すれば全てのシャッターが開き先に進めるようになる。ただし、此处にたどり着くには途中にあるシャッターを1つづつ開けていかななくてはならない。もちろん、それらの開け方も基本的には変わらない。シャッターに近づくと地図上に行くべき部屋が表示されるからそこに行ってPDAを操作すればオーケーだ』

地図上には新たに青い光点が点滅しているものと、点灯しているものが1つづつ表示されていた。

点滅しているものは司たちのいる場所と重なっていて、目の前のシャッターを示しているのだとわかる。そして、点灯している所が行くべき場所なのだろう。

スミス

『これで大体説明は終わったかな。ちなみにこのエリア内にいるプレイヤーは全員で6人。協力して早くゲームをクリアしてもいいし、封鎖されているのを利用して首輪の解除を目指してもいい。何をするかは個人にお任せするよ。それじゃ、エクスト

かれん

「司さん、何か近づいてきます」

スミスがゲーム開始を宣言しようとしたその時かれんがそれを遮って声を出す。

かれんが指差すほうを見ると小さめのサッカーボールほどの大きさの黒いボールが1つこちらに転がってくる場所だった。

スミス

『ごめん、ごめん、1つ重要なことを言い忘れていたよ。このゲームにはプレイヤー以外にも参加してくれる友達がいるんだ。そう、そこにいるボールがそうだよ。そのボールはね、プレイヤーを自動的に追いかけていく。そして、プレイヤーにぶつかると・・・』

そういつてスミスは1度言葉を区切ると何処からともなくリモコンを取り出してそのスイッチを押す。すると、

ドカン

司

「うわぁ」

かれん

「きゃあ」

ボールが突然爆発した。

今は二人から離れた所で爆発したからよかったが、もし体の近くで爆発していたら大変なことになっていただろう。

スミス

『と、このように爆発するから気をつけてね。』

それじゃあ、改めてエクストラゲーム

「レッツ プレイ タグ イン ラビリンス」

ゲームスタート

」

『ゲーム開始より19時間56分経過 / 残り時間53時間4分』

第8話（後書き）

エクストラゲーム開始です。

今回は説明だけだから短くなる、と思って書いていたらいつの間にかあまり変わらない量に・・・

何処で間違ったかな？

さて次回はついにあの人が再登場の予定です。

次回をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6232k/>

シークレットゲーム episodeK

2011年10月6日22時29分発行